**葛西　久二 （かさい・きゅうじ）**

**１、プロフィール**

戯曲家。疎開中の作家太宰治を金木に訪ね、太宰道場の門下生となる。道場では「生意気君」と呼ばれた。太宰の小説「母」の「小川君」は、葛西がモデルである。

＜生没＞

1923（大正12）年９月17日～2011（平成23）年７月29日

＜代表作＞

戯曲「雨神楽」（「津軽文学」第２号掲載）

＜青森との関わり＞

木造町出身。西北地方の文芸誌「津軽文学」に戯曲を発表。「木造町の年表的文化史」を「広報きづくり」に連載した。

**２、作家解説**

大正12年９月17日、西津軽郡木造町（現つがる市）に、葛西久吉、とき の次男として出生。生家は明治の頃から金又（かねまた）旅館として青森県官指定旅館であり、国・県・軍関係者の他、民俗学者折口信夫などが宿泊し繁盛した。木造町立向陽尋常高等小学校から県立木造中学校に進学。戦時中は横須賀海兵団を経て、海軍飛行予科練習生となり、鹿児島海軍航空隊二二五分隊、徳島海軍航空隊三三分隊に所属した。

戦後、友人木村久邇典らと疎開中の作家太宰治を金木町の生家に訪ね、大いに薫陶を享け、「太宰道場」の門下生となった。太宰の小説「母」（「新潮」第44巻第３号、昭和22年３月１日発行）の「小川君」は、葛西がモデルである。太宰の生家を訪ねた小川君は軍隊での体験談を語った。小川君は上官に対し生意気な言動を吐き、度々殴られたのだが、両方の眉を剃り落したところ、態度も生意気であるとして、さらに上官に殴られたと言う。以後、「太宰道場」では、小川君こと葛西は「生意気君」と呼ばれるようになった。

昭和34年３月に発足した「津軽文学の会」の同人となり、生家の旅館が総合文芸誌「津軽文学」の連絡先、合評会場となった。同誌第２号に、戯曲「雨神楽」（54枚）を発表。「お母（おガ）」の台詞の一部。「止めへじゃ、止めへじゃ」、「神経この」、「てんぽな話だ」、「ばが童子（わらし）この」、純津軽風の台詞が並んでいる。

同年６月、五所川原商工会議所で開催された「太宰治を語る座談会」では、ユーモアたっぷりに、「太宰氏と地方文化」と題して講演した。

平成14年１月より、地元木造の著名人の足跡を整理した「木造町の年表的文化史」（29回）を、「広報きづくり」に執筆。「彼の長身白皙の異国的美貌が水際立っていたからであろう。しかし彼が一流の本物の詩人であることは知る人はなかった。」（「広報きづくり」№479、平成15年２月発行）と、詩人一戸謙三を紹介している。

平成23年７月29日、つがる市の病院で急性肺炎により逝去した。

**３、資料紹介**

〇「津軽文学」第２号

雑誌

1959（昭和34）年８月30日

210㎜×150㎜

「津軽文学」は、西北地方の執筆陣による総合文芸誌（第１号、昭和34年４月～ 第５号、昭和36年２月）。第２号（昭和34年８月）に、戯曲「雨神楽」（54枚）が掲載されている。中農の家庭、神楽の様子が、純粋な津軽弁で語られている。